

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2779500475		
法人名	社会福祉法人野のはな		
事業所名	グループホーム野のはな		
所在地	阪南市和泉鳥取950-7		
自己評価作成日	令和5年11月30日	評価結果市町村受理日	令和6年1月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・認知症状の進行により日常生活に支障をきたしても、常に優しい言葉かけで自尊心を傷つけないよう配慮を行いサポートしている。 ・ホーム全体を明るく演出するために職員手作りのイラストやディスプレイ、行事の際の写真等を飾っている。 ・気候が良い時にはホーム周辺を散歩したり季節の花を見にドライブに出掛けたりしている。 ・入居者それぞれの心身の状態に合わせて的確なサービスを提供するために必要な技術・知識を身につけるようにし、フィードバックしながら幅広く学び、安全・安心な暮らしを提供できるよう努めている。 ・規則正しい生活を送っていただくなかでも毎日行っているリズム体操を続けることで、運動機能の低下を防ぎ、精神的に安定した毎日を送れるよう努めている。
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター		
所在地	大阪市中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階		
訪問調査日	令和5年12月22日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>社会福祉法人「野の花」は南大阪を中心に障がい者と高齢者の事業所を10か所運営し、オレンジジョブ(泉南生活協同組合)は13か所のシニアマンションを中心とした施設をもっている。各事業所は障がい者の就労の場ともなり法人間は一括して運営されている。「グループホーム野の花」の職員、利用者、家族ともコープの組合員で地域の一人として生活している。事業所は開設後20年になる、1ユニット9名の定員に職員が17名と手厚く配置されている。見守りが行き届いており家族の安心感も強い。事業所理念「いつの日も自分らしくいきいきと」を実践しようと頑張っている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	グループホーム野のはなの理念でもある「いつの日も自分らしく生き生きと」を常に介護の基本と考え、職員は明るく前向きな姿勢で、元気な対応を心がけ、日々のサポートを行っている。	理念はいつも利用者と職員が過ごしている居間に貼ってある。新人教育の際に説明しているが、自分らしく生き生きとは、利用者だけでなく職員の姿勢でもあることを理解できている。毎日掲示を見ているので理念の実践が自然に身についている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	新型コロナウイルスへの対応は緩和されたが、地域での感染状況を常に把握しながら出来る範囲での交流(地域の祭礼の見学、事業所独自で開催している秋祭りへの参加呼びかけ)を行っている。	法人が自治会に加入している。地域の情報は主に地域内に住んでいる職員と運営推進会議に参加する2か所の自治会役員から得ることが多い。市の広報は毎月人数分班長が持ってきてくれる。地元の祭りにはやぐらが事業所前まで来てくれてやりまわしを披露してくれた。ボランティアの訪問も再開されている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年に6回開催している運営推進会議の中で各地域の自治会長や福祉委員、保険者や地域包括支援センターに対して事業所内の現状や対応方法などを報告している。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所内での出来事を報告し、それに対する意見や助言をいただきながら話し合いを行い、質疑応答の内容は全て記録している。記録は、後日保険者と地域包括支援センターへ郵送し報告している。	コロナ禍もほぼ別室で開催された。参加者は校区福祉委員(兼民生委員)2か所の自治会長、地域包括、家族と事業所で、内容は各種報告であるが特に事故やヒヤリハットの報告は詳細にされている。参加者の意見交換も活発に書かれている前向きな内容である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	提出書類はできるだけ窓口へ持参するようにし、不明な点は電話ですぐに確認をするようにしている。	運営推進会議に包括と交代で、市介護福祉課から職員が出席するので、事業所の中のことにはよくわかってもらっており、電話でのやり取りも円滑にできている。市から介護相談員の受け入れを行っており運営に活かしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月毎の身体拘束適正化委員会の開催、年間研修計画に組み入れて所内研修を行っている。チーム全体で取り組み、ケアを実践している。	建物玄関はデイサービス営業中(平日)はオープンになっており、グループホーム出入口、エレベーター、階段もフリーになっている。帰宅願望の強い人もいるが、散歩やドライブなどで気分転換を図っている。事業所では身体拘束の例はない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年間研修計画に組み入れ、資料の配布、入居者一人ひとりの様子や身体チェック(入浴時)を行いながら常に状態を把握し、虐待防止を徹底している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年間研修計画に組み入れ、資料を配布する等して全職員に周知徹底を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、施設長より詳しい説明と確認を行い、変更がある場合には家族に連絡を入れ詳細を説明したうえで郵送または来訪していただき、署名・押印をもらっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に一度、家族会を開催し日々の暮らしを家族に見ていただいたり家族からの意見や要望を聞く場をもうけていたが、新型コロナウイルス感染防止のため2020年以降開催できていない。 個別に電話での対応や家族の面会は可能なので、来訪時に話しをする機会をもうけている。	毎年5月の家族会を来年度は再開の予定である。家族の事業所への信頼が厚いようで、今回の調査のアンケートでも感謝の言葉は多いが、要望や意見はなかった。現在面会は全面的に自由としている。便りは月1回送付している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	事業部会議の内容を毎週行う事業所会議で報告し、職員からの質問や要望を施設長が聞く体制をとっている。また現場での実務も行き、ケアに対する疑問なども解決するよう努めている。	毎週1回その日出勤している職員がフロアで集まり、上部会議の伝達報告を聞いたり、ケアに関する話を話し合っている。意見はその時でることもあり、現場でそのつど出ることもある。年1回の個人面談もあり職員ヒアリングによれば意見は言いやすいとのことである。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎月、職員の希望休をふまえたシフトを作成し、働きやすい環境や時間帯の調整を行いながら、職員同士が協力し助け合える環境づくりに配慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間研修に基づき、所外で行われている研修にも積極定期に参加し取り組んでいる。他部署との連携をとったり、教育部から資料を取り寄せたりして質の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市町村主催の研修会への参加や介護相談員報告会等に参加するようにはしていたが、コロナウイルスの影響で近年は参加できていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者からの要望や不安に思っていることを常に傾聴したり日々の様子を観察したりすることで職員全員が情報を共有し「寄り添うケア」「傾聴ある態度」を常に心がけ、入居者のニーズに応じた対応や家庭的な環境作りを実施できるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	担当者会議や電話、来訪時のやりとりのなかで家族からの要望等を聞き取り対応している。 体調の変化があったり外来受診や往診等で変更点があった場合はすぐに電話にて報告し、常に連絡をとりあうようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス内容の変更や新たなサービスが必要と思われる場合は、家族に連絡を入れ来訪できるようなら来訪していただき本人の状態や要望を報告したうえで適宜対応するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は常に入居者と目線を合わせ、日々の会話やコミュニケーションを図るなかで本人が望む暮らしを送れるようなサービスを提供できているのか、安心していただけるよう信頼関係を築けているのかを考えながら支援を行うよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の心身の様子や生活の状態を必要に応じて電話にて報告し、来訪時には直接話をして、買い物等の家族の協力も得ながら安心して生活を送られている様子を確認してもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	2020年からコロナ感染拡大のため館内入館禁止で(緊急時は除く)馴染みの方やご家族さえも面会出来ない状況である。馴染みの場所にも出向く事はないが、馴染みの方からお手紙やアルバムが入った封筒が届き懐かしんで頂いている。中には返信もされている。	現在家族の面会はフリーになっている。主に家族支援により、墓参りやなじみの場所に出かけたり、一時帰宅する人もある。はがきを買ってきたり、投函したりするような支援も行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	管理者・計画作成担当者をはじめ、職員全員が情報を共有し、意思疎通が困難な入居者の代弁役となり、皆で行うイベント時などは職員が寄り添い全員参加できるよう配慮している。 また、入居者同士がぶつかり合うようなことがあれば、職員が仲介役となり皆が居心地良く過ごせるよう努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	状況に応じて管理者や計画作成担当者が中心に対応できるよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の日常生活を全面的にフォローしながら自己決定や選択の機会を作り、それぞれの望む暮らしとは何かを考えながら対応できるように努めている。認知症の進行により自己決定や意思疎通が困難な方には、家族に相談し本人本位な対応ができるよう努めている。	自分の思いを正確に伝えられる人は2~3人である。自宅に帰りたいという願いはわかっても実現は難しい。その場合は他の作業を促したり、ドライブなどで気分転換を図っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前や入居後にも本人や家族からの聞きとりを常に行いながら、一人ひとりのこれまでの暮らしぶりやその背景にある思い、家族同士の関わり方などの情報を収集しながら今後のサービスに活かせるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	高齢化、認知症状が進行するなかで入居者一人ひとりのADL、心身の状態を細やかに観察し、それぞれの機能を見極めながら個別に対応しケアを行うよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族からの聞きとりを行い、会話の中からも情報を収集しながら、主治医との連携を図り介護計画を作成している。	入所時に取ったアセスメントシートを職員間で検討し計画書を作成している。期間中は支援経過をしっかりと記入・モニタリングを行い、短期計画終了時に(6か月)ケア担当者、医師、看護師(照会)と計画作成で担当者会議を行って更新作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	サービス提供記録簿、業務日誌、職員会議記録をもとに本人、家族、その他関係者と情報を交わし、アセスメントやケアプラン、モニタリング作成の際には情報を活かしながら定期的に見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	それぞれの入居者の状況に合わせ、個別に必要な限りの支援を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	家族との連携は密にとっているが、地域との関わりは薄い。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回の往診を受けている。(緊急時の往診や24時間体制で電話対応もしている)必要に応じて専門外来などの医療機関の受診も行っている。	内科は全員かかりつけ医の診察を月2回受けている。訪問歯科は希望者のみ週1回口腔ケアと必要な場合は治療を行っている。他科受診は家族が同行する場合もあるがほとんどの場合は事業所に対応している。かかりつけ医とは24時間電話対応可能で、看護師はかかりつけ医から訪問してくれる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同建物内のデイサービス看護師や隣接の特定施設の看護師との連携を図っている。体調異変時には状態を伝え確認してもらいながら、医療連携体制も整え、24時間体制で主治医に連絡を入れ、指示を仰げる体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時にはソーシャルワーカーや病棟看護師に入居者のADL等の情報を伝え、治療の経過等を報告してもらえよう連携を図っている。また家族からも情報が得られるよう連絡をとるようにしている。これまで入院歴のある病院のソーシャルワーカーとは頻繁ではないが連絡がとれる関係を築けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	医療機関と連携し、本人や家族の意向を最優先に考え、職員が一丸となってチームでのケアを行うよう努めている。	入居時に重度化した場合、事業所では医療行為ができない事、介護職員でできることを説明している。状態が悪化した時は医師から家族に説明があり、終末期の対応について医師、家族、事業所で話し合いを行う。事業所として家族から看取りケアの希望があれば対応するが、開設以来看取り事例が2例と少ない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年間研修計画に基づき、毎月所内研修でフィードバックを行っている。必要に応じて実技演習も行い、職員はできるだけ参加するよう募っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回(日中・夜間想定)の避難訓練を実施し、緊急時対応マニュアルを作成して全員で周知徹底している。	年2回避難訓練を実施している。事業所の隣に同法人の介護施設があり災害時には協力体制ができるようになっている。重介護の利用者が多く夜間に火災が発生した場合も夜勤者が一人では対応できないが、直ぐに隣から駆けつけてくれるという強みがある。非常食や備蓄品の保管も一括して法人で管理している。	令和6年3月末までに作成が義務付けられているBCP(業務継続計画)の準備がまだできていない。災害や感染により業務に支障をきたさず継続して運営できるよう早急にBCPを作成し職員に研修することを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「尊厳の保持」「傾聴ある態度」「プライバシー保護」については職員へ周知徹底している。また年間研修計画にも人権や倫理についての研修を毎年行うよう組み込まれている。	人権研修や個人情報に関する研修を実施している。利用者の呼び方は名前で呼ぶように統一し、話す時の目線は同じ位にし、介護を開始するときには必ず声を掛けるようにしている。自分で意思が伝えられる利用者には着る服を選んでもらうようにするなど、人格を尊重した対応に心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活のなかで、入居者が自己決定や意思疎通が図れる環境を作り、困難な方には家族の意向を確認し、寄り添える支援を行うよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務優先にならないことを常に職員に徹底させ、どの場面でも入居者の目線で物事を考えて取り組み、それぞれの入居者のペースに合わせた個別支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	モーニングケア時、特に身だしなみには職員が統一ケアを行うよう徹底し、外出等の際には洋服にも配慮し、その時々でおしゃれを楽しんでいただけるよう努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事面では、それぞれの体調に合わせた形態で提供している。偏食気味で栄養が偏っている方には本人希望のカロリーメイトを食事と一緒に提供している。 後片付けの際に、いつもテーブルを拭いてくれる方がいるので、快く引き受けていただけるように促している。	食事はセントラルキッチンで法人全体の調理を行い各事業所に届けられる。盛り付けは事業所で職員が行い、利用者はテーブルを拭き食事の準備をしている。外食に行ったり出前を取ることはしていないが、行事の時にはスポンジケーキにデコレーションをしたり、ゼンざいを作って食べている。旬の果物を提供して喜ばれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	サービス提供記録簿で毎食時の摂取量を管理し、糖尿病の方にはカロリー制限をした食事を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは欠かさず実施している。週1回の訪問歯科もあり、必要時は指導も受けている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日々のチェックで排泄パターンを把握し、定期的なトイレ誘導を実施している。排泄動作への介助は言葉をかけながら時間がかかっても自己にて行えるところは促し、過剰介護にならないよう注意している。	立位の取れない4名の利用者以外は日中トイレ誘導している。着衣の上げ下ろしや排泄後のふき取りなど出来るだけ時間が掛かっても自分でできることをしてもらい排泄の自立に取り組んでいる。夜間はオムツで対応、ポータブルトイレで排泄、3時間毎に声掛けをするなど個々の利用者の状態に合わせて対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	往診時に主治医に排便状況を報告し、薬の見直しをこまめに行ったり水分摂取量が少ない方には家族に相談して本人が好む飲み物を準備してもらったりしながら排便コントロールを行っている。また適度な運動も行うよう体操する時もある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居者の状態変化に合わせて3種類の入浴(個浴・機械浴・一般浴)にて安全に実施できるように努めている。行事と重なったり本人が乗り気ではない場合等は、他入居者と交代して実施することもあり、臨機応変に対応している。	デイサービスが併設されているので、午前中はデイサービスの利用者が入浴するため入居者の入浴は午後からにしている。一般浴で入浴できない場合はチェアーインバスで椅子に座ったまま浴槽で温まることができる。調査日は冬至でゆずが用意されていた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠障害のある方には出来るだけ日中軽運動(DVDを観ながらラジオ体操やリズム体操)を行ったり、天気の良い日は外で日光浴をしたりして生活にメリハリとリズムをつけた支援をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとり使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の効能や使用目的については薬局から届く薬の説明書や居宅療養管理指導書を確認している。また状態変化があれば、すぐに主治医に相談する体制を整えている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	職員全員が個々の生活歴を把握し、無理強いでなく出来る事を積極的に行ってもらえる環境作りに配慮している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じた外出、ドライブ、近隣への散歩を日々行っており、写真を撮って思い出に残すようにしている。	敷地が広いので敷地内を散歩したり、新聞や食事が配達された時に利用者は職員と一緒に取りに行き外気に触れている。先月は紅葉狩りに行ってきた。紅葉狩りに行けなかった利用者も個別に対応してできるだけ屋外に出られるように支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金は所持していない。物品購入時等は施設が立て替え購入を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人持参している携帯電話で自由に連絡を取り合っている。出来る方は手紙のやり取りも行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	行事の際に撮った写真は掲示板に貼り、季節に応じた飾りは職員が作ったり入居者と一緒に作ったりしてディスプレイしている。皆が集まる食堂では、居心地の良い空間づくりに配慮している。	行事の写真や季節が感じられるような壁紙を利用者と職員と一緒に製作し、掲示している。洗濯物を畳んだり、お喋りしたりできるような廊下にはソファが置かれている。職員の作った日めくりカレンダーで今日が何月何日かを確認することができる。共用空間の掃除は障がい者雇用をし、フロアの掃除は毎日職員が行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	3階共同空間にはソファを設置している。2階共有多目的フロアではカラオケをしたりDVD観賞をしたりする環境がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れた家具や馴染みの家具を持ち込んでもらい、安心して穏やかな暮らしの提供が出来るよう支援をしている。	各居室にはベッド、エアコン、防災カーテン、洗面台が設置されている。居室の向きにより天窓のある部屋、二か所に窓のある部屋もある。信仰心のあつい人の部屋には棚に聖書が並べられている。写真を飾ったりテレビを置いたりして本人本位で居心地よく過ごせるようにしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々のタンスには入居者にも分かりやすいようシールを貼って衣類を収納したり、ポータブルトイレを設置して安全に排泄ができるようにしている方もある。L字型サイドレールを使って自力で立ち上がれるよう配慮した方もある。		